

# インクル

The Periodical of Accessible Design

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)

## 目次 contents

第15回法人賛助会員活動報告会報告 「不便さ」から「良かったこと」へ (森川美和)	2
新たな市場開拓～医工連携事業の推進～ (小林広樹)	4
平成25年度課題解決型医療機器等開発事業 「看工連携推進事業」報告 (森川美和)	5
触って色がわかる！？－“いろポチ”の開発 (佐川賢)	6
公益社団法人日本包装技術協会 2014 日本パッケージングコンテスト (森川美和)	7
(独) 国立科学博物館 「2014夏休みサイエンススクエア」 (森川美和)	8
共用品推進機構に縁のある方々が新しい視点で描く書籍紹介	9
随想「私と共用品」第70回 「合理的配慮の時代」 (濱井良文)	10
<キーワードで考える共用品講座> 第83講 「社会の要請と共用品 (その1：市場の失敗)」 (後藤芳一)	11
<事務局長だより> 輪が重なる、輪を重ねる (星川安之) 共用品通信 奥付	12



# 第15回法人賛助会員活動報告会報告 「不便さ」から「良かったこと」へ

～共用品・共用サービスの新たな展開～

平成26年7月17日（木）午後2時から東京ドームホテル（東京都文京区）において、第15回（公財）共用品推進機構法人賛助会員活動報告会を行った。この報告会は例年、前年度事業と決算が、評議員会、理事会で承認された後に行っている会合である。本年は、新たな視点で取り組みを始めた「良かったこと調査」をテーマに掲げ、活動報告、講演を行った。

会の冒頭で、花島<sup>はなしまひろし</sup> 弘 理事から、賛助会員の賛同と支援によって本機構が成り立っている旨のお礼のあいさつがあり、続いて星川<sup>ほしかわやすゆき</sup> 安之 専務理事が、平成25年度の事業報告及び26年度事業の進捗についての説明を行った。

平成25年度も、発足当初から注力している三本の柱、「調査研究」、「標準化の推進」、「普及及び啓発」について、国内外の障害者団体、業界団体、規格作成団体、調査機関等々と協力、連携を図りながら業務を遂行した。（詳細につ



（写真：活動報告会風景）

いては、『平成25年度活動報告書（第15期）-共用品推進機構白書-』を参照ください。）

今年の報告会では、二つの講演をお願いした。最初は、「人に仕事を合わせる、ユニバーサル農園・京丸園の取組み」と題して、京丸園株式会社 社長 鈴木<sup>すずきあつし</sup> 厚志氏にご講演を頂いた。



（写真：挨拶する花島理事）



（写真：報告を行う星川専務理事）

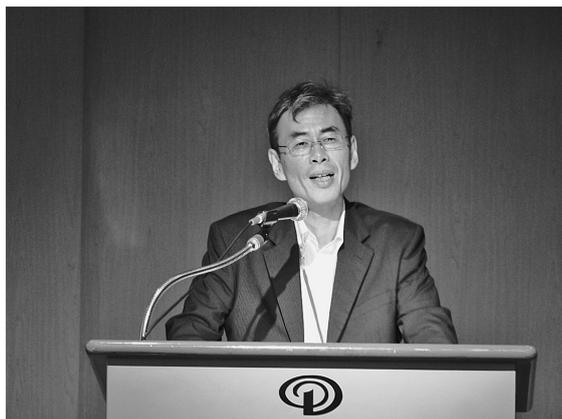


（写真：講演中の鈴木厚志氏）

鈴木氏がこれまで経営者として農業に携わってきた中で、「人に合わせた仕事のあり方」について試行錯誤を繰り返した経緯を踏まえ、「障害のある人は生産性をあげる」、「障害という個性が仲間関係をより豊かにする」というこ

とを、事例やデータを基に行われた講演は、人を惹きつけ、説得力ある内容で、参加者の心に深く残るものであった。

続いて経済産業省産業技術環境局国際標準課統括基準認証推進官の藤代尚武氏より、「官民の標準課戦略の強化に向けて」としてご講演を頂いた。



(写真：講演を行う藤代尚武氏)

国際標準化への取組強化の必要性として、戦略分野における国際標準の重要性や知財戦略と一体となった標準化対応の必要性の高まり、特許を巡る国際的な係争、日本企業の標準・知財戦略強化の必要性等、難解なテーマではあるが、今後の我が国に必要な知識等を分かりやすく説明して下さった。

今年度は国際標準化特定戦略分野（7分野12項目）や国際市場での競争優位に必要な分野について、トップスタンダード制度も活用しつつ、国際標準開発、認証基盤構築等を担う民間企業・団体、試験研究機関、認証機関等を対象として、戦略的に国際標準化活動を加速させる旨の報告があった。

### 法人賛助会員紹介

活動報告会では、ご出席頂いた法人賛助会員からのスピーチを頂いており、本年も実施した。スピーチの内容は、法人賛助会員企業が、“現在取り組んでいること”、“共用品との関係”、“個別に取り組んでいること”、“講演の感想”などで、バラエティに富んだ報告をいただいた。

活動報告会の締め言葉として、大宅映子評議員が、共用品推進機構との出会いから現在に至るまで、そして今後の弊機構のあり方について軽快かつ明快地語った。さらに出席者にむけて、更なるご支援、ご協力頂きたい旨の挨拶があった。



(写真：挨拶をする大宅映子評議員)

### 交流会～発足当初から変わらないもの～

交流会開会に先駆け、発足当初より国際業務では多大なご支援を頂いている山内繁氏、アクセシブルデザイン標準化に関する審議委員会の委員長を務めて頂いている青木和夫氏、経済産業省医療福祉機器産業室の阿部英紀室長補佐よりご挨拶を頂いた。

続いて望月庸光理事の乾杯があり、「この会に集まってくださる方々の人柄がとても暖かく和やかであるが、これは発足当初から変わらない。これが共用品推進機構を支えてくれている源」と感謝の意を表し、会は和やかな中に進行した。

年に一度、賛助会員企業が集う貴重な一日。来年もたくさんの方に集まって頂けるよう努めたいと思っている。

会の様子は、以下の共用品のブログで紹介しています。

#### 【講演会】

<http://www.kyoyohin-news.org/archives/51947208.html>

#### 【交流会】

<http://www.kyoyohin-news.org/archives/51947645.html>

# 新たな市場開拓～医工連携事業の推進～

株式会社三和製作所 代表取締役社長

こばやしひろき  
小林広樹

今年4月、私は初めて現場の状況を把握する目的で在宅医療現場を訪問する機会がありました。

「訪問看護ステーション」に勤務する「訪問看護師」と患者宅に伺いました。医療的処置はもちろん、排泄の処理から入浴の際は、洗髪、洗顔、歯磨きまでを笑顔でコミュニケーションをとりながら行うその女性看護師は、湿度の高い浴室で髪を振り乱し、顔面には大粒の汗を滴らせていました。その現場の印象は「圧巻」のひとつと言でした。

高齢者であろうと病気や障害であろうと「ひとの大切な営み」にこれほど寄り添い、立ち向かう仕事を、私はそれまで見たことがありませんでした。

このことをきっかけに、医療機器の企画・開発に携わる企業として、平成26年度医工連携事業化推進事業に公募しました。

この事業は、医療現場が抱える課題に対して、工業分野が連携して、コンソーシアム（共同体）を作り課題ごとに解決し、医療の質的向上、また医療機器産業の活性化を実現する目的として、平成22年度より経済産業省の実証事業として実施されています。

日本は、昨年平成25年に、65歳以上の高齢者が3,000万人を超え、超高齢化に突入し、高齢者比率、平均寿命など、どれをとっても世界一の高齢者先進国となりました。

病院における病床数は入院希望者数に耐え切れず、病床を回転させなければならないため、在院日数は全国平均で17.2日、都心では10日前後となり、今後より一層の短縮傾向が予測されます。その為、病院から在宅へスムーズな移行措置が求められてきます。

## ■採択案件

私たちのコンソーシアムが、この度応募し採択を受けた案件は「在宅医療に適したスターターセットの開発」です。この事業は、大きく2点にフォーカスしたものです。

1点目は、「在宅の導入時に患者のタイプごとに必要な物品を予めセットにした在宅医療に適した医療機材等」の研究・開発であり、病院から在宅への移行の際に、看護師や患者家族に負担がないように、患者を病状、年代、男女などのカテゴリーに分けた材料をセットにして提供できるように、その内容を有識者や専門家の方々と検討・開発していきます。

2点目は、「病院用の医療機器を在宅用の医療機器に生まれ変わらせる」という機器の改良・開発です。

今までの在宅医療現場では、病院で使用されている医療機器や周辺材料を、そのまま流用している実態があり、必ずしも在宅に適しているとは言えません。病院で使用される機器は、使用者が医療従事者を想定した設計になっているため、操作ボタンが複数あり、その設定や操作方法も複雑です。また、緊張感を醸し出すアラーム音が鳴り響き在宅には適さない要素が多くあります。この機器開発の要件として、在宅環境に操作部分だけではなく、デザイン面においても適する開発を目指していきます。

今後益々求められ、変化する在宅医療現場に、「機器開発」や「ものづくり」、そして、それらを現場に届けられる「物流のネットワーク」を構築し、在宅医療現場に関わる人々のニーズや課題が解決できるよう、微力ながら努めて参りたいと思います。

# 平成25年度課題解決型医療機器等開発事業 「看工連携推進事業」報告

昨年度、共用品推進機構は(株)三菱総合研究所から、経済産業省平成25年度課題解決型医療機器等開発事業の「看工連携推進事業」を受託した。

課題解決型医療機器等開発事業は、現場の課題・ニーズを製品化に結び付ける医工連携での事業化促進を目指したものである。しかしながら、医療機器の場合は、臨床研究や治験・薬事申請等に長い時間がかかるために、現場ニーズを活かしたものづくりのサイクルを短期間で試行してみることができない。そこで、看護現場の課題・ニーズを対象に、薬事申請が必要ない製品プロセスをとりあげ、看護現場の「ものづくりプラットフォーム」(「入口：ニーズの開発」と「出口：効果的な販売戦略」を重視した「売れるものをつくる」プラットフォーム)の構築を検討することとした。

平成24年度は三菱総合研究所にて、看護現場からの課題・ニーズの収集、技術・シーズを持つ企業とのマッチング等、今後の看工連携の在り方について検討を行ってきた。平成25年度は、共用品推進機構に事業を委託し、看護サイドと販売サイドの双方の実態を踏まえ、看護師に幅広く需要のある製品を企画・開発・販売できる仕組みのあり方を検討した。

看護現場の「ものづくりプラットフォーム」(「入口：ニーズの開発」と「出口：効果的な販売戦略」を重視した「売れるものをつくる」プラットフォーム)の構築について検討することを目的に、以下の三つの調査を実施した。

①看護師が使用する製品について供給側からのアプローチで課題を抽出

②ニーズの掘り起しプロセスを看護現場のヒアリングを通じて実証

③上記を踏まえて売れるものをつくるプラットフォームへの提案

本調査により、①製品ニーズ情報の収集・蓄積機能、②製品情報などの収集・蓄積機能、③製品評価の収集・蓄積機能が重要であることが整理された。またこれらを病院単位や地域単位など、身近なところから実践しつつ、経験値や情報を共有しながら進化していくことが重要であることが指摘された。

この調査結果を反映した報告書は、「医工連携による医療機器の事業化ポータルサイト(MEDIC)」にて全文ダウンロードすることができる。

また本報告書は、すでに看護関連用品に参入している企業、これから医療業界に参入したい企業、医療現場で働いている看護師が読むことを前提とした。今後、これらのステークホルダーが製品開発に取り組む上での一助になれば幸いである。

もりかわみわ  
(森川美和)

■医工連携による医療機器の事業化ポータルサイト (MEDIC)

<http://www.med-device.jp/index.html>

■平成25年度看工連携推進支援事業

(共用品推進機構への委託調査)

[http://www.med-device.jp/html/development/cooperation\\_2013.html](http://www.med-device.jp/html/development/cooperation_2013.html)

# 触って色がわかる！？－“いろポチ”の開発

日本女子大学非常勤講師/(独)産業技術総合研究所名誉リサーチャー

さわげん  
佐川賢

このタイトルを見ると、驚かれる方、不思議に思う方が多いことと思います。超能力かと思う人もいます。ちょっと過大広告かもしれませんが、まったく色の見えない方に衣服の色を伝える触覚タグのお話です。

全盲の視覚障害者の前で色のお話をするのは失礼、というのが暗黙の了解でした。でも、そんな心配は全くご無用。視覚障害者の方も、色は見えずとも色に対する関心は高いのです。すべての人とは言いませんが、特に女性であれば自分の着る衣服の色などには、かなり強い興味を示します。

ある日、視覚障害者と閑談をしている時、「佐川さん、自分の着る衣服の色が分かると便利なんですけどね・・・」と、期待ともお願いとも取れる言葉がその方から発せられました。ちょうど私が4年前産業技術総合研究所を退職して日本女子大の被服学科に勤め出したころ。専門の色彩学とアクセシブルデザイン、そして被服の3つをカバーする研究テーマを探していた時でした。これだ！と思いました。

ニーズ・課題のみが先行し、研究はそれからの話でした。検討すべき問題点などを4年間の在任中に一つ一つ取り上げては、毎年変わる卒論生と一緒に研究し、その知見を積み重ねてきました。そしてやっと完成したのがTactile Color Tag「いろポチ」です。

図1がT-シャツの襟につけた小さな「いろポチ」の写真です。タグには図2にあるように、時計の文字盤のような位置にポチポチの凸点が



図1：“いろポチ”タグを付けたT-シャツ

10個（図の外側の円）ついています。上から、時計回りに赤、橙、黄、と続き、円の中央には縦に並んだ3点があり、無彩色の白、灰、黒を表します。このうち1点が中抜きになっていて、指先で触って探し当てて対応する色がその衣服の色と分かります。黄色や青は上から時計回りに3番目と7番目です。薄い色は点の上ではなく、少し内側を抜いて表します。

「いろポチ」の開発の一番のポイントは円環状に色を配置した図形で色を知らせること。色だけを知らせるのであれば点字で“アカ”と記せば良いのですが、「いろポチ」は色相環という色の特性を利用して、色の近い・遠い関係を表します。赤と橙は近い、赤と青緑は反対とか、そんな色の関係が分かり、配色やデザインに応用できます。つまり同系色や反対色などの概念が分かり、自分で衣服の色を選びカラーコーディネートを楽しむことができます。

今、このタグはタグメーカ「(株)フクイ」からアパレルメーカーに向けて販売を開始しました。個人売りも考えていますが、シャンプーのギザギザと同じように、すべての衣服に当たり前に付くことが大切です。衣服に限らず、家電製品や生活用品に「いろポチ」をつけて、生活にあふれる色を私たちと共に楽しんでほしいと願っています。なお、「いろポチ」はフクイが命名した製品名です。

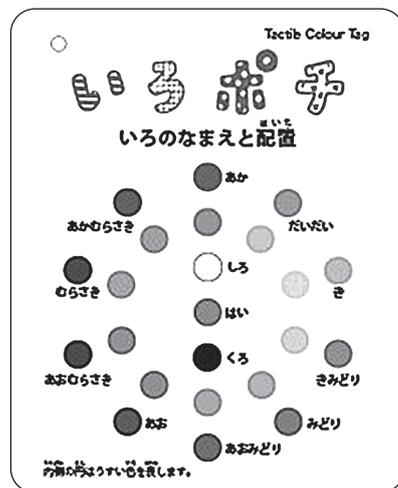


図2：“いろポチ”の色配置

# 公益社団法人日本包装技術協会 2014 日本パッケージングコンテスト

～共用品推進機構理事長賞は「プリマヴィスタ ディア コンパクトケース (スポンジアップ)」(花王(株)、吉田コスメワークス(株))が受賞～

日本パッケージングコンテスト(公益社団法人日本包装技術協会主催)は、優れたパッケージとその技術を普及啓発することを目的として、昭和42年(1967年)に第1回目が開催された。

以後、隔年に実施されてきたが、平成9年(1997年)に最高賞として経済産業大臣賞の設定が認可されたのを機に毎年開催されるようになった。

このコンテストの大きな特徴は、パッケージデザインからロジスティクスまでというコンセプトのもとで、包装の全分野を対象、網羅して実施されていることである。

平成26年のコンテストは、6月に行われた。応募件数354点の中から、最高賞として設定されているジャパンスター賞には13件が選定された。

今年の経済産業大臣賞には「明治ブルガリアのむヨーグルト900g、480g(テトラ・トップ・ベース)」(株明治/日本テトラパック(株))**(写真1)**が選ばれた。経済産業大臣賞に選ばれた本商品は、これまでのゲブルトップ容器から、キャップを付けた容器に変更することで、再選可能となり使いやすさが向上した。さらに、注ぎ口が広口になっているため注ぎやすく、液切れが良いのでヨーグルトが口部に付着しにくい。また注ぎ口に手が触れることがなく開封できるため、衛生面、環境面、アクセシブル面な

どあらゆる面で配慮が行き届いた製品と言える。

アクセシブルデザインに関連した分野では「プリマヴィスタ ディア コンパクトケース(スポンジアップ)」**(写真2)**が共用品推進機構理事長賞として選ばれた。

ジャパンスター賞は、上記の2賞の他、経済産業省産業技術環境局長賞、経済産業省製造産業局長賞、日本商工会議所会頭賞、日本貿易振興機構(ジェトロ)理事長賞、日本生産性本部会長賞、日本パッケージデザイン協会賞、日本マーケティング協会会長賞、日本グラフィックデザイナー協会賞、消費者団体推薦賞、そして日本包装技術協会会長賞で構成されている。

さて本年度の共用品推進機構理事長賞を受賞した「プリマヴィスタ ディア コンパクトケース(スポンジアップ)」は、加齢で進行する指先の運動機能低下や目の衰えがある人でも快適に使えるファンデーション用コンパクトケースを開発。

ファンデーション塗布のスポンジはコンパクトを開けると持ち上がり、取り出しやすくなっている。鏡は拡大ミラーで細部まで大きく写してくれる。粉飛抑制シートは固定式になっており、起き直す手間や紛失などしないよう配慮したことが評価された。

一度は手に取ってみたい工夫である。

もりかわみわ  
**(森川美和)**



(写真1:「明治ブルガリアのむヨーグルト900g、480g(テトラ・トップ・ベース)」)



(写真2「プリマヴィスタ ディア コンパクトケース(スポンジアップ)」)

# (独)国立科学博物館「2014夏休みサイエンススクエア」

## 8月5日～7日に子ども向けワークショップ開催

(公財)共用品推進機構は8月5日～7日の三日間、東京・上野の(独)国立科学博物館が主催する「2014夏休みサイエンススクエア」でワークショップを開催した。このイベントへの参加は7年目。

今年は(株)タカラトミーのスタッフの方々の協力のもと、100名を越える子ども達が訪れ大盛況となった。

平成19年(2007年)から毎年夏休みの時期に、参加させて頂いている「夏休みサイエンススクエア」。今年も毎年好評の「触って分かる絵を作ってみよう」をテーマに1日4回のワークショップを行った。

触って分かる絵とは、視覚障害のある子ども達が使用する「レーズライター(表面作図器)」を使って作成するものである。触って分かる絵を作成する前には、共用品や共遊玩具の代表例をいくつか紹介して、その工夫に気付いてもらったりした。

今年はタカラトミーの共用品推進課のスタッフ3名のご協力を頂いた。一人は渡辺俊之<sup>わたなべとしゆき</sup>さん。デザイナーでもある渡辺さんは、子供達の好きなパンダの下絵をスラスラと描いてくださった。渡辺さんが書いた下絵は大好評で、あっという間になくなってしまふ人気ぶりだった。

二人目は、子供達に共用品や共遊玩具の工夫について、<sup>よしださやか</sup>分かりやすく楽しみながら説明をして下さった吉田沙也加さん。子供達は身を乗り

出して吉田さんの話を聞いていた。<sup>たかはしれいこ</sup>

そして3人目は、全盲の高橋玲子<sup>たかはしれいこ</sup>さん。子供達が作った作品を一つ一つ丁寧に触って、一人一人に言葉をかけてくれた高橋さん。高橋さんの周りには子供達が絶えず集まり、高橋さんが点字をスラスラ読んだり、点字絵本の絵を触っただけでイラストの雰囲気が分かったりする姿に感嘆の声を上げていた。

今回は小さな子供(幼児)から中学生までと



(高橋さんに絵本を読んでも頼んだり、点字をスラスラ読む姿に不思議そうな表情を浮かべたりする子供達)



(一所懸命に触って分かる絵を作成する子供達)



(説明をする吉田さん)

幅広い参加があり、それぞれの回で、子供達の興味の示し方や反応などが違い、とても面白いイベントとなった。また付き添いの保護者からも、共用品の工夫に対する関心が増したように見受けられた。

普段、学校などの教育現場ではあまり見かけない夏休みの子供達の姿を通して、いつもとは違う場面で共用品や共遊玩具を知るということは、子供達にとってもよい刺激となり、共用品の普及という側面からも私達にとっても貴重な機会であると感じた。

機会があれば折に触れ様々な場面で、共用品や共遊玩具を伝えるイベントを行う必要性を強く感じている。

(森川美和<sup>もりかわみわ</sup>)

\*レーズライター：ビニール製の作図用紙の表面にボールペンで描いた図形がその形のまま浮き上がるため、描きながら指先でなぞることができる器具で、特に目の不自由な子どもたちの学習具として活用されている。

### 『福祉工学への招待 ～ヒトの潜在能力を生かすモノづくり』（伊福部達著、ミネルヴァ書房）

本書は、日本における福祉工学の第一人者、伊福部達氏が、学生時代の本分野との出会い、そして現在まで実施してきた数多くの研究軌跡が、本人の筆で詳しく紹介されている貴重な一冊である。

「ゴジラ」映画のテーマ曲を作曲した伊福部昭氏の甥であることで、彼の研究テーマの一つが「音・聴覚」になった事は、後に地震を知らせる「緊急地震速報チャイム」の福祉工学を生かした作成へとつながる。依頼主のNHKから、「緊急性を感じさせるか、不快感や不安感を与えないか、騒音下でも聴きやすいか」などの条件が伊福部達氏に課せられた。完成するまで何度も、高齢者、難聴の子供、成人にも試聴してもらい、当事者の「潜在能力」を活用するという手法に、彼の一環した研究ポリシーが貫かれている。そしておじが作曲した「シンフォニア・タビカーラ」をモチーフにして作られたのが、現在も緊急時にテレビ・ラジオから流れるあのメロディである。研究は、聴覚を皮切りに、視覚、言語、身体へと及び、多くの成果をあげている。その成果は本書を通じ、いち早く超高齢社会に突入した日本において、ヒトの潜在能力を生かすモノづくりがいかに大切かを教えてくれている。

（星川安之）



### 『何かお手伝いしましょうか 目の不自由な人への手助けブック』（立花明彦著、産学社）

目の不自由な人を見かけたとき、どのようにサポートしたらよいか。視覚に障害のある著書がエピソードを交え、その方法をわかりやすく解説している。

第1章は「目が不自由な人のことをちゃんと知ってみよう」。目の見え方やみんな点字を読めるのかを説明したあと、サポートの基本、シーン別実践方法を展開している。肝心なのは第2章「キホンのキ」の声かけ。「大丈夫ですか?」、「どちらへ行かれますか?」ではなく、「何かお手伝いしましょうか」で始めること。この声かけの言葉は、必要があれば手伝うという意味が示されていて、声をかけられた方も、困っていたらお願いしようという気持ちになり、明解な声かけの言葉としている。

第3章のシーン別の実践方法で、具体的に段差や階段への誘導、乗り物への乗降を紹介。エスカレーターと一緒に乗るときは、動いている場所へ乗り込むことになるが、本書ではエスカレーターの幅の広さ別に乗り方を解説している。イラストも多く取り入れ、目の不自由な人に全く接したことのない人でも、その状況を想像しやすい構成になっている。各章の間に登場するコラムでは、「目の見えない人しか知らない世界」と題して盲導犬や点字ブロック、IT機器の使用を挙げており、あまり知られていない盲導犬の歴史や点字ブロックの国際化、目の不自由な人がどんな風にパソコンを使っているかを知ることができる。

本書は、目の不自由な人が困ってそうだったけど、気づかなかったふりをしてしまった、そしていまそのことを少し後悔している人に、参考書として活用して頂きたい。

（金丸淳子）



### 『INCLUSIVE DESIGNインクルーシブデザイン』（ジュリア・カセム、平井康之他編著、学芸出版社）

社会の課題を解決する参加型デザインという形で、インクルーシブデザインを考える本書。編著者で共用品推進機構個人賛助会員の平井康之氏は本書で、インクルーシブデザインは、“サービスや製品の対象とするグループについて、出来るだけ多くのユーザーを包含し、かつ利益や顧客満足というビジネス目標に対し有効なデザインを目指す考え方”と、述べている。また共用品の分野で長年交流のあるジュリア・カセム氏は、いくつかのケーススタディを挙げ、「人間をデザインプロセスの中心に置く時は、彼らの言葉に真剣に耳を傾け、よく観察し、ニーズとその願望を理解すべきである。そうすれば、最終的なデザイン結果は当然素晴らしいものになるであろう・・・」と語っている。実践可能な事例はデザイナーだけでなく、モノ作りに携わる人達にも大いに参考になる。またカセム氏は自身の章末で、「いつの日か『インクルーシブデザイン』『デザイン・フォー・オール』『ユニバーサルデザイン』とわざわざ言わなくてもよい日が来ることを願う」と結んでいる。弊機構の理念に通じるものが多くある一冊である。

（森川美和）

## 「合理的配慮の時代」



毎日新聞社点字毎日編集部 はまいよしふみ  
濱井良文

自覚するようになって30年以上、かつてはよく「色盲・色弱」と呼ばれた色覚異常の目と付き合ってきた。

自分の場合、希望した進路を断念するといった決定的な体験はなく、黒板に赤色のチョークで書かれた字や雑誌のグラビアページの活字が読みにくい、駅の電光掲示板で赤の表示が抜け落ちて見えるといった具合で、日常の小さな苦勞で済んできた。それでも「このコップは黄色じゃないよ。黄緑だよ」などと子供たちに指摘されながら、常に弱点と意識して暮らしている。

ここ数年、できるだけ多くの人に見分けやすい配色を用いようというカラーユニバーサルデザインの動きが盛んになっているのは心強く、その理解が広まってほしいと願っている。孫の世代に遺伝があったとしても、弱みを感じることなく暮らしていける世の中になっているかもと期待も抱かせてくれる。

このように共用品や共用サービスの考え方の大切さを実感しているが、仕事で接する全盲の視覚障害者や盲ろう者のことを考えると、専用の手段や福祉機器についても忘れないでと強調したい。

今年1月に日本も批准した障害者権利条約は、ユニバーサルデザインを「調整又は特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲で全ての人が使用することのできる製品、環境、計画及びサービスの設計をいう」と定義している。

障害当事者も策定段階に深く関わった条約だけに、多くの人が使えようにしたとしても必ずこぼれ落ちる人がいるのをふまえたもので、「ユニバーサルデザインは、特定の障害者の集団のための補装具が必要な場合には、これを排除するものではない」と付け加えているのも見逃せない。

数は少なくとも、「ユニバーサル」から外れる人たちのために必要な手段をいかに用意できるのか。こちらにも目配りを忘れないことが大切だ。

点字は視覚障害者の文字だが、見えない人の誰もが使っているわけではないことは、段々と知られるようになってきた。使用者の数も年々減っている。音声やIT利用の環境が進展するにつれ、古くからの紙媒体の点字が占める地位が相対的に低くなっているのも、その大きな要因だ。

見えない、見えにくい人にとって手段が増えるというのは喜ばしいことで、サポートする側がそれら多様なメニューを一通り選択肢として用意できれば問題はない。しかし実際は、コストや効率などを理由に、最大公約数の手段が提供されているのが実態。結果として、望んでいたものとは違う方法を強いられたり、まったく使えなかったりという人が出てくる。

例えば、地方自治体の発行する広報誌。本当は点字で読みたい人がいるにもかかわらず、音声での提供を希望する人の方が多いために、テープやCDしか用意していないというケースは少なくない。

自力で読み書きできる点字には、音声に代え難い強みがある。こうした点を、説得力をもって伝えられるコミュニケーションの力が、合理的配慮の在り方が焦点となる障害者差別解消法(2016年4月施行)の存在する時代に、当人や関係者に問われている。そして、その訴えに耳を傾け、理解し、必要な体制を整えられるようになるだけの社会の側の度量もまた、これから問われてくるだろう。

# 「社会の要請と共用品（その1：市場の失敗）」

ことよしかず  
後藤芳一（日本福祉大学客員教授、東京大学大学院 工学系研究科教授）

**共用品**<sup>3 6 10 13 14 16 ~ 37 40 42 44 ~ 82</sup>（小さい添え字<sup>① ~ ②</sup>は、同様の用語が本講の第1～82講に既出であることを示す）は、直接の需給だけでなく、背景にある**社会**<sup>① 15 18 27 28 31 32 67 73 ~ 76 78 ~ 81</sup>との関わりのもとで存在する。社会のありようと課題、求めるものと共用品の関係を考える。

## 1. 社会的課題

社会にある課題を国際的な視野で見ると、**環境**<sup>③ 5 ~ 6 67 72 ~ 76 80 81</sup>（産業公害、地球環境）、**生物多様性**<sup>③ 64</sup>、**水、資源・エネルギー**<sup>⑥</sup>、**食糧**<sup>② 3</sup>、**人口**<sup>④ 67 74 82</sup>、**疾病**<sup>⑦ 78 80 81</sup>、**障害**<sup>③ 5 8 11 12 11 17 18 22 23 35 37 40 ~ 44 47 60 62 64 66 67 71 ~ 81</sup>、**高齢化**<sup>① ~ 5 7 8 10 ~ 14 17 18 22 ~ 29 31 32 34 ~ 42 48 ~ 50 55 56 60 64 67 71 82</sup>、**災害、民族、文明、領土、グローバル化、労働**<sup>⑤ 25 35 37 39 40 74 76 77 79 81 82</sup>、**格差、貧困**<sup>⑥</sup>、**差別**<sup>⑦ ~ 81</sup>、**人権**などがある。これらは原因・結果として互いに関わっている。技術が進歩し、社会や経済の制度が発展しているにも拘わらず、課題は**複合化**<sup>⑥</sup>・**拡大**し、**持続性**<sup>⑥</sup>に黄信号が点滅している。

## 2. 課題の生じる背景

課題が生じる背景には、より根本になる原因（自然、社会、経済）がある。自然（例：気象・気候、資源・エネルギー）、国際政治（例：リアリスト（現実主義）、リベラリスト（理想主義））、宗教、民族、人口などである。その並びで経済がある。資本主義経済とその中心である**市場**<sup>② 4 ~ 6 12 18 19 31 32 ~ 34 36 37 39 41 43 44 47 ~ 50 55 56 58 60</sup>の機能は効率と公正の機能を持つとされ、現代社会を発展させてきた。他方、それ自身が課題を生む一因にもなっている。その代表例が「市場の失敗」である。

## 3. 市場の失敗（その1：定義と伝統的事例）

市場には需要と供給を効率的に調整し、資源の最適分配を行う機能があるとされる。ただしそれは理想的状態（完全競争市場）を前提とする（完全競争市場：①市場に多数の参加者、②財やサービスの質が同じ、③情報が共有されている、④市場参入や撤退が自由、を同時に満たす状態）。

すべてを満たす市場はないため、「市場の失敗」（調整機能に偏り）が生じる。失敗例は独占・寡

占、外部性（ある経済主体の行動が他に影響を与える（マイナスの影響を外部不経済という（例：公害））、公共財、情報の非対称性、費用低減産業などである。その対策として**政策**<sup>① 2 4 7 8 12 18 26 ~ 28 30 32 39 40 51 74 75 79 81 82</sup>による介入が必要とされる。具体的には、独占禁止法（独占・寡占）、環境規制（外部不経済）、政府によるインフラ整備（公共財）、消費者用製品の品質表示<sup>③ ~ 5 9 11 19 21 35 42 71 74</sup>義務（情報の非対称性）、幼稚産業の保護（費用低減産業）が行われてきた。

## 4. 市場の失敗（その2：今日の背景と対応の必要性）

こうした対策（政府による市場介入）が行われて来たにも拘わらず、社会的課題（上記1.）は深刻化している。その原因として、人口や経済活動の拡大で地球の有限性が顕在化（例：資源・エネルギー）、社会の成熟化（例：人口高齢化、成長の鈍化）、経済のグローバル化（例：地域が国際競争や状況の急変に直面）などの問題が影響を及ぼしていると考えられる。

問題には、伝統的な対策の範囲を超えるものも多い。例えば経済活動がグローバル化して一国の政府の対応の範囲を超える、**情報化**<sup>② 7 19 ~ 21 23 26 29 31 40 41 73 76 ~ 80 81</sup>・**グローバル化**によって経済活動の規模が増し対策に大きい資源を要する、政府の財源に制約があり（高齢化等に伴う**財政**<sup>④ 42 74 ~ 76 82</sup>制約の常態化）政府の力でできることに限りが生じているなどである。よって新たな対応策が求められている。

## 5. 対応の方向性と共用品

新しい取組みが広がりつつあり、課題対応の新しい方向性として注目される。例えば①伝統的主体（例：政府、産業）以外の存在が拡大、②伝統的主体が新しい役割を担う、③全く新しい性格の組織が出現、④③のうち運動自体が中心であるものなどである。①の例は市民（団体）、NGO・NPO、第3セクタなど、②は企業の社会的責任（CSR）など、③は社会起業家による非営利ベンチャーなど、共用品は④といえる。

# ■輪が重なる、輪を重ねる

## ■働く時の「3つの輪」

『日経ビジネス』の2014年8月11・18日、合併号の「有訓無練」のコーナーで、日本IBMの副社長を50歳で飛び出し「経営者」を職業としてきた倉重英樹氏（現シグマクス会長兼社長）が、「仕事の面白さを彩（いろど）る『3つの輪』を広げよ」のタイトルで、下記の文を寄せている。

「経営者として何をしてきたかと問われれば、人にとって働くとは何か？働きやすい環境とは何かを追い求めてきた」と背景を語り、仕事を行う時の要素を、3つの輪で説明する。その3つの輪とは、「やるべきこと」、「やりたいこと」そして「できること」であると説く。そしてこの3つの輪が大きくなり、互いに重なる部分が増えれば増えるほど人は、仕事を面白いと感じると論じている。

## ■共用品の3つの輪

より多くの人が使えらる製品・サービスである「共用品・共用サービス」も、「一般製品」、「福祉用具」、そして「共用品」の3つの輪で表現している。

共用品の普及を始めた1991年当時は、「福祉用具」と「一般製品」の2つの輪の重なりで共用品を表していたが、1996年、共用品の市場規模の調査を始めた時、2つの輪に「共用品」の輪が加わり3つの輪となった。

## ■移動という「輪」は？

9月のとある土曜日、電動車いす使用歴20年の高橋秀子さんと、10年ぶりに東京下町を散策。地下鉄大江戸線の都庁前駅で待ち合わせ、エレベーターでホームへ。彼女に誘導され、車いすマークのあるホームドアへ。このマークのあるドアの前は、他の乗車口と違い



星川 安之  
ほしかわ やすゆき

事務局  
だより

スロープになっていることを教えてもらう。

なんなく大江戸線に乗車、両国駅で下車、地図も持たずに住宅地を進むと、朝稽古を終えた相撲部屋の力士たちが外で休憩している場面に出くわし、自然と記念撮影。その足で、東京江戸博物館に向かい、特別展「思い出のマーニー展」を見学。券売り場でも入口でも係の人は、電動車いすに戸惑うことなく応対。会場内もスムーズに見学。続いて水上バス。券売り場の人からリフト付き船なら乗船可能と説明を受ける。リフトを使用しスムーズに乗船、浅草にむかった。浅草では、二階建てバスの二階には車いすでは乗れないことが分かり、気持ちを切りかえコミュニティバスに乗車。運転手さんが慣れた手つきで、折り畳み式スロープを広げ高橋さんの乗降を補助。乗っていた人達も、彼女が入るスペースをすっとあけてくれた。三の輪駅でおり、次に都電に乗り換え、西巢鴨で下車、都営三田線、そして春日で大江戸線に乗り換え都庁前に戻った。「10年前と比べて、各段に移動しやすくなったわ。」と高橋さん。

障害のある人の移動の「輪」と、障害のない人の移動の「輪」の重なりは、この10年で確実に大きくなってきたが……。

「二階建てバスの二階に乗ると、風を感じられるかしら？」散策の途中で高橋さんが、ポツリと言った言葉に、輪が更に重なるための大切なヒントがつまっていると考えた。

## 共用品通信

### 【イベント】

【7月】

平成25年度活動報告会（17日）

【8月】

「2014夏休みサイエンススクエア」（森川、5～7日）

### 【会議】

【8月】

第1回AD体系的技術標準化委員会（本委員会）（21日）

第1回TC159国内検討委員会（26日）

### 【講義・講演】

【7月】

国立特別支援教育総合研究所 講義（星川・森川、8日）

神奈川県立保健福祉大学 講義（星川、23日）

【8月】

武蔵野美術大学 講義（星川、1日）

早稲田大学 講義（星川、6日）

早稲田大学 講義（星川・松岡、29日）

【9月】

ひょうごアシステック研究会第3回勉強会講演（星川、7日）

アクセシブルデザインの総合情報誌

## インクル 第92号

2014（平成26）年9月25日発行

"Incl." vol.14 no.92

©The Accessible Design Foundation of Japan  
(The Kyoyo-Hin Foundation), 2014

隔月刊、奇数月発行

一般頒価 1部1000円

（但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています）

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのCD-Rを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行（公財）共用品推進機構  
郵便番号 101-0064  
東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F  
電話：03-5280-0020  
ファクス：03-5280-2373  
Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org  
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子  
事務局 星川 安之  
森川 美和  
金丸 淳子  
松岡 光一  
三好 泉  
田窪 友和  
本田 和枝  
青山 泰隆

執筆・協力 小林 広樹  
（五十音順） 後藤 芳一  
濱井 良文  
関戸 菜美  
中野奈津美

印刷・製本 サンパートナーズ(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、共用品推進機構までご連絡ください。

上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。